







特集

# ヨシのちまきはいい香り。

今回、お話を伺ったみなさん

北川健次さん  
島小在職9年目の教員

野瀬準子さん  
島小在職4年目の  
教頭先生

村地嘉博さん  
島小在職1年目の  
校長先生



あまいる探偵団(以下あまいる)▼島小学校では、総合学習で地域の方々と連携されているようですが、どのように行われているのでしょうか？

北川健次先生(以下北川)▼僕がこの学校に赴任して来た当初、はちみつ屋さんから電話があった。「巣箱置いといたけどいつすんねや？」って言われるし、「コメ袋に入った菜の花の種がどどんと集まってくるし、なんのことかわからんかったんですわ(笑)。その時は学校ではちみつ採るのを毎年してたみたいで。

もともと『郷土教育』というか、地域で畑を作ったり家畜を育てたり全国的にすごい事をしてやっていたみたいなんやけど。僕が来る十年ほど前からは、地域の何を活かすかってことでやっぱり『菜の花』に着目して。それは何のために作ってんのかいと思ったら祭りの松明のためなんです。各町ごとに松明をすのから菜の花があると。それを理科の時間に栽培して観察していく。菜の花で何をすんねんやろかという話になって、菜の花で油が絞れるんやと、油絞って何するんやろと、そういう話を、お芋ドーナツを揚げて食べる。ほんで松明を作ったり、環境やエネルギー問題などにつなげて、総合学習に結びつけていって学習していくんです。

に、将来よそに出て行った後も「島ってああいうところやっただな」という事を思うやろし、またもう一回帰ってこようかなって。

だから学校も、地域の人の支援を受けながらやっていこうってことが大事やと。地域から支援にきてくださった方が、「毎年子ども達からお手紙もらったり、ありがとって書いてある作文もたら、わしやこれが一番嬉しいんや」と言ってる。自分が子ども達の役に立ってるって、手紙をもらったら喜ばはる。

野瀬準子教頭(以下野瀬)▼お互いに気持ちがいいっていいか。来てもらって嬉しい、来て嬉しいうっていい形。いつも地域の方たちは「芋植えはいつ来るんや」とか、「むべ採りはいつ来るんや」と言いなから待っててくれてはる。至れり尽くせりしてくれてはるけれど、何か子ども達のエネルギーや気持ちを受け取ってくれてはるんかなあ。

あまいる▼地域の人たちが学校と一緒に子ども達を育てるって感じがすごく根付いているんです。

## ちまきを食べながら

野瀬▼今日も三年生が地域のヨシの葉を使ってちまきを作ったんです。ちまきを食べて、子どもらね「島でよかった！」って言うてたね。

あまいる▼それは嬉しい言葉！

野瀬▼聞いてるとやっぱり作るのってすごい手間がかかるものなので、おばあちゃん世代でも作れる人が減ってるから、初めて食べる子もいて。おうちの方も何人か来てくれてはったんですけど、教えてもらってすごい喜んでました。

村地嘉博校長(以下村地)▼このちまきをくくってるスゲは一年前に取ってきて、一年間置いてようやく使える。ヨシの葉は若い方がいいので、きれいなものを探して舟に乗って行って下さる。一つ作るのに五枚使う。七十個もちを用意してくればはったので三百五十枚要るわけですね。そういうのも準備してくれてはって、大変な手間がかかっています。

北川▼おもちも地域の方が作って来てくれるんですよ。子どもはそれを包むんです。

あまいる▼包むのが難しいんですねー。

野瀬▼包むのが面白くてみんな夢中で、やっぱり自分の手でやったことか味とか香りってずっと覚えてるんですね。ふるさとの味。ふわーって香りが広がる。

北川▼一回如てますからヨシの葉っぱの風味が染み込むんです。

野瀬▼コンビニでもどこでも同じものが食べられる時代はね、これはほんとにこの時期しか食べられないし、このヨシ原の近くに住んでる人しか食べられない。私も最初食べたとき「ほんとになんていいものをいただいたんだらう」とすごく感動しました。

あまいる▼すごくいい香りがある。

北川▼以前は葉っぱも子ども達が取りに行っていたんですよ。葉っぱ取りにヨシ原の中に入っていくじゃないですか。ヨシキリの声を聞いてたりね、葉っぱの擦れる音とかを感じながら子ども達の背より高いヨシの間を歩いていくわけですね。

あまいる▼その景色もきつと記憶に焼きついて残るでしょうね。

野瀬▼この里山も、ひとつの手が入らないとこんなにきれいな風景に残らないし、「なんでこれ残してはるのかな？」とか、ヨシ原保全に携わってる方々の想いとか、昔の人の知恵とかね、そういうものに触れて欲しいと思うんですけど、やっぱりそれって教師のコーディネート力。構想する力が本当に問われます。

北川▼学習指導要領が変わって、総合的な学習の時間が始まった頃、地域の何を活かしているのかっていう時に、その時にいた先生らがやっぱり菜種とかヨシとか、地域の素材に着目したほうがいいと違うかっていう話になったんやろね。

野瀬▼最初は週三時間あったんですけどね、今もう週二時間になって、あれもしたいこれもしたいと思ってもすべてをやりたい切れない中で、図工の時間を使ってヨシのランタンを作ったり。

北川▼ヨシで笛作ったりね。

野瀬▼それでヨシ笛奏者さん来てもらって音楽会をしたり。

あまいる▼子ども達の反応はどうですか？

北川▼子どもたちはね、食べることを喜んでますね。食するってのはね、大事だと思えます。ただ単に作るだけやったらねあんまり楽しみがないので、お芋さんでもやっぱり焼き芋しますよ。そういうのがない。

## 地域を活かした学び

あまいる▼地域と繋がった総合学習を続けていく上で、困っていることとか、工夫されていることはありますか？

野瀬▼新しく来た先生にどう伝えていくかという難しさはあります。

北川▼ぼくら教師は異動で「コロコロ変わって行く。そうすると元々やってはった先生の発想が伝わらずに、菜の花を取り上げる、油をしぼる、というところが伝わってきいて、何のためにするのかって事がなかなか伝わりづらいところがあったんです。それで、六年前に県から環境教育のプロジェクトをするように言われたんで、その機会にもう一回再認識して、持続可能な社会を作るための教育としてはどうあるべきかという事を見直して。今までやってきた事をもう一回やるっていうことで、一年生やったら何が出来る、二年生やったら何が出来る、というカリキュラムを作った。

野瀬▼ヨシと菜種の学習は長く続けて来たし残していきたい。そのために春に、地域コーディネーターさんと長くいる北川先生と一緒に行けるだけしゃべって、押し付けにならないように、こんなありますよとこれまでにやってきたことや地域の人を紹介しています。なかなかそれを理解してやるまでに時間がかかるんですけどね。

北川▼単級の学校なんでね、全部一人で構想せんならんでしょ。一人で何してもいい、自分の好きなように出来るっていい良さはあるんやけど、一人でせんならんでしょ。うしんどさもある。

野瀬▼でも逆に小規模の学校でね、本当フットワークが軽くてどこでも行けるので、ちまきづくりでも、百人以上いたら難しいですよ。

北川▼でけへん。二十人前後やから出来るってのはありますね。で、漁業見に行くとか、田んぼへ行くとか、ヨシ見に行くとかでもね、市のバスが運行してもらえらるんですよ。二十人やつたら一回で乗れる。例えば理科の実験でも二人に一台顕微鏡が使える。六年生は一人に一台です。大きい学校やたら五、六人に一台でしょ？他の学校の子と比べたら、やっぱりいるんなこと、自分が出来るっていい良さがある。そういう意味では充実してます。

野瀬▼それと、島はやっぱり周辺の自然の豊かさっていうのは圧倒的にありますね。

村地▼どこでもできませんんやんか。やっぱりここできれないことがあるかなあという気がしますね。

## 開かれた学校へ

あまいる▼この地域やからできた、単級やからできたという部分もあつた、地域の人と一緒に子ども達を育てる、うちの子だけじゃなく子ども達を育てるという意識が作られていく、それを地域の人と共有している、というところが印象的だなと思ったんですけど、その辺はどんなふうにならされてきたんですか？

野瀬▼今、地域との協働って言うわけですが、昔は学校の決めたことを地域の手に手伝わってというニュアンスだったのが、今はいろいろな支援員さんや、スクールソーシャルワーカーさんや、スクールカウンセラーなど、学校の中に様々な職種の人が入ってくださることが普通になってきて。島はとくに地域の人が普通に参画してくださるので、お手伝いしてもらって言うよりは一緒にやってくという姿勢が教員の中にあるのかなあと思います。この学校もそれは今変わってきてると思いますよ。

北川▼ある種、権威的な学校から、地域に開かれた学校という言い方をしますけれども、開いていくというその意味がね、地域の人と結んでいく、というか。学校という空間の中で全部やってくるんじゃなくて、そこに地域の人が入ってきて一緒にやるというかな。

野瀬▼そんなに壁がない、フリーに入ってもらえるような学校に変わってきて、みんな子ども達を育てるというスタンスですね。

北川▼ほんでやっぱり規模。学校の規模は、大きいより小さい方がええね。ここまで小規模がいいかどうかっていうのはあるけれどもね。フィンランドなんかはもっと小規模の学校の方が多いわけですから。やっぱり顔が見える、つながれるような程度の規模っていうのはあると思いますね。

▽編集後記


島小学校でいただいた、素朴で優しいちまきの、あのヨシの香りを思い出しながら。私たちは、生きるためになくてはならない自然との繋がりが、食べるということをしつかりと次の世代に伝えていかなくては、と改めて感じています。

自然を大切に生きるという事が私たちの暮らしを守り、そしてどれほど豊かなことか。広く子どもたちに知ってほしい。

学校はみんなが平等に学べる場所。子どもたちが生きることの根元を体験を通じて実感しながら学べる環境作りはとても重要だと思います。

そのために、学校と地域と保護者が知恵を合わせていきたいです。

(あまいる探偵団 志重未来)



暮らしのコラム バンクーバーから前編

## 日本になくてここにあるもの



ほぼ20年ぶりに帰って来たバンクーバーは、人口が増え、車が増え、とっても忙しい街に変わっていた。数ヶ月の居を構えた場所は、隣の街や空港から入ってくる片側3車線両側6車線の大きな道と、碁盤の目の街バンクーバーを斜めに横断するこれまた片側3車線両側6車線の大きな道の交差点に面している。住んだ場所のせいでもあるが、クラクションを聞かない日はない。しかも怒りに任せて出す音の長いクラクションだ。運転手たちがこんなにイライラしているとは…

けれど、この忙しい大きな道をいっぽん中に入ると、そこは閑静な住宅街がつづく。その歩道を歩く。それぞれの家の前庭には様々な植栽があり、今はバラがあちこちに咲きほころぶ。歩道の隣は芝生の緩衝帯がつづき、その緩衝帯には大きな樹が立ち並ぶ。だから住宅街を歩けば、大きな樹々に抱

かれながら散歩ができる。風が吹く、木の葉が揺れる、ざざーと葉の擦れ合う音がする、梢で鳥がなく、姿は見えない、かと思ったら、キツツキが芝生をつついてる。

家から歩ける距離にはいくつも公園がある。ざっと思い出すだけで10はある。「公園」と書くと、日本の灰色の砂と灰色の土しか思い描けないが、ここは一面芝生と所々に大木がそびえ立ち、小さな遊具もしつらえてある。もちろんベンチも。日本の公園には夏の陽を遮るものがなく、子どもを遊ばせるのに親は苦行をしいられるが、ここではそんなことはない。

たいていどこにでも、陽を避けて歩いてたどりつくことができるのは、街中に大きな樹々があるおかげだ。大きな樹は木陰を作り、木陰と日向の温度差が風をよぶ。心地よい風が街中を吹き抜ける。ちなみに電信柱(木製)も立ち並ぶが、

確実に(ほんものの)樹の方が背が高い。ここでは樹の方が立場が強いのだ。

家の前の6車線の道路にでると、ここは灰色の街だけど、ちょっと小高い遠目からこの街を眺めると、こんもりと緑に包まれた大地に建物のかけらがちらちらと見える。こんな大きな街なのに、森の中にあるように見えるのだ。

こんな街を出て車で1時間も走ったら、今度は本当の森の中、山の中に突入、何度も絶景にぶち当たる。川は川のまま、湖は湖のまま、護岸工事のされていない本来のそのまの姿でそこにある。そこはもともと先住民の土地であったり、資源国故に木の伐採地が広がっていたりと、問題はいろいろあるにせよ、日本にはもうない、本来あるべき姿のままの自然が残っているこの地を、私は恋しいと思うのだ。

どうして日本人はすぐに木を伐ってしまうんだらう…

中野和子 母/碧いびわ湖理事/あまいる探偵団 現在、カナダに一時滞在中。